

見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



August						
S	M	T	W	T	F	S
						1 2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

August 2025 vol.136

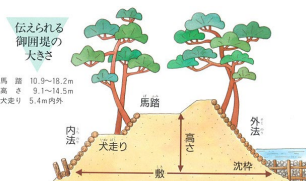
◆ 玉ノ井二重堤

所在地：一宮市木曽川町玉ノ井

交通：名鉄尾西線「玉ノ井」駅 西約 500m

犬山市から弥富市にかけて、木曽川の左岸には御囲堤と呼ばれる長大な堤防が築かれています。御囲堤は、江戸時代の慶長 13(1608) 年から 14 年にかけて築造された堤防で、徳川家康の命を受けた伊奈備前守忠次の指揮により工事が行われたことから、伊奈備前堤とも呼ばれています。洪水からの防御や安定した農業生産はもちろんですが、築造当初の一番の目的は名古屋城防衛の第一線とすることでした。関ヶ原の合戦直後の当時は豊臣秀頼がまだ健在であり、西国に対する拠点となる尾張藩を防衛する必要があったため、木曽川を防衛線とする御囲堤が築造されたのです。やがて、大坂夏の陣により豊臣家が滅び、江戸幕府の体制が確立すると、御囲堤の軍事的な意義は薄らぎ、尾張藩を木曽川の洪水から守るという目的が強くなっていきました。

御囲堤の構造は、高さ 9.1m ～ 14.5m、堤防の上部には馬踏と呼ばれる幅 10.9m ～ 18.2m ほどの平らな部分が設けられ、人が歩いたり物資を運んだりするのに使われました。また、陸地側には、水が堤防を乗り越えた場合に勢いを弱めるため、犬走りと呼ばれる幅 5.4m 程度の段差が設けられました。人々が桜を觀賞することにより堤防が踏み固められると考えた幕府は、堤の上に桜を植樹したとされ、その一部は現在も残されており、各地で花見の名所になっています。



木曽川上流河川事務所 HP より

ところで、江戸幕府が安定し人口が増加すると、御囲堤の川側にも民家が建ち並び、田畑も耕されるようになり、木曽川町の玉ノ井や里小牧のあたりでは、木曽川に向けた前面に小堤防が築かれるようになりました。江戸時代から昭和にかけて、この小堤防は木曽川の水防に一定程度の効果を発揮していましたが、昭和 13(1938) 年 7 月、連日の豪雨により木曽川が増水し、10 か所以上にわたり決壊、小堤防から流出した水による被害は約 65ha、床上浸水 150 戸、床下浸水 60 戸に及び、水勢で倒壊した家屋も多数発生しました。災害からの復旧にあたり、愛知県は当時の内務省（現在の国土交通省）に委託し、昭和 14 年から 18 年にかけて、延長約 2.5km の小堤防の改修工事を行いました。このときから、堤内側に在来の本堤（御囲堤）があることから、玉ノ井二重堤と呼ばれるようになりました。玉ノ井二重堤は、戦後においてもかさ上げ等の改修工事が進められ、昭和 30 年に現在の堤防が完成しています。

現地を訪れてみると、自転車道の二重堤と堤防道路の御囲堤があり、間に家々が建ち並んでいる様子もよくわかって、この地域の水防の歴史を感じ取ることができます。



google earth で見た玉ノ井二重堤（左）と御囲堤（右）



◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感したいだけでなくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしていきたい。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

●^{ごみょうわじゅう}五明輪中 (vol.12,2015.4)

所在地：弥富市五明町

交通：JR 関西本線「弥富」駅 西約 500m

愛知県西部、濃尾平野のゼロメートル地帯は、水との闘いを繰り返してきた地域です。長野県中部の鉢盛山を水源とする木曽川と、岐阜県郡上市の大日岳を水源とする長良川は、濃尾平野で揖斐川と合流し、伊勢湾に注いでいます。この大河は洪水のたびに流路を変え、昔から数多くの水害をもたらしてきました。江戸時代に入り、徳川家康の命により東側には御囲堤が築かれ、尾張藩は水害から守られるようになります。その後、薩摩藩士が命がけで工事を行った宝暦治水を経て、明治になるとオランダ人技師デ・レーケによる本格的な改修が行われ、三川分流が実現しますが、昭和 34(1959) 年の伊勢湾台風で大きな被害が発生するなど、現在に至るまで治水の努力が続けられています。

弥富市はこの木曽三川の下流域に位置し、木曽川とその支流の堆積土で形成された沖積層からなる地層で、輪中も存在する場所です。ここでは、地震で堤防が損傷したことによる浸水や、関連する水害も数多く発生してきました。

宝永 4(1707) 年宝永地震の際には、堤防の陥没・崩壊が起こり、翌年から数年間水害を蒙ったという記録が残されています。また、嘉永 7(1854) 年安政東海・南海地震でも、堤防の陥没、浸水、田畑の沈下が起こり、翌年には高潮被害にあったという記録が残されています。五明輪中（現在の五明町付近）では、宝永地震の際に堤防がごとごとく切れ、一面海になったと伝えられており、この翌年の宝永 5(1708) 年から正徳 5(1715) 年にかけては 5 度の高潮・高波による被害にもあっています。



◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.12 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

★一宮市びさい夏まつり

2018 年まで開催されていた濃尾大花火（一宮市・羽島市市民花火大会）は、2 尺玉や長さ 200m のナイアガラ、スターマインなど、迫力ある花火が有名な花火大会で、5,000 発の打ち上げ花火を見に、多くの来場者が訪れていました。

しかしながら、2019 年に大雨の影響で、2020 年、2021 年には新型コロナウイルス感染症の影響で中止になると、羽島市が撤退し、現在は、一宮市び



一宮市観光協会HPより

さい夏まつりにおいて打ち上げ花火が披露されています。

一宮市びさい夏まつりは、毎年 8 月第 2 土曜日に尾西河川敷グラウンドをメイン会場として開催される祭りで、盆踊りや手筒花火などのイベントが行われた後、濃尾大花火より規模は小さいものの、河川敷において約 2,000 発の鮮やかな花火が打ち上げられ、夏の夜空を彩ります。

～鉄道で巡る～

名鉄尾西線は、弥富市の弥富駅から一宮市の玉ノ井駅までを結ぶ、22 駅の路線です。名鉄一宮駅から玉ノ井駅までは、1 時間に 2 本の折り返し運転となっており、玉ノ井線とも呼ばれています。



photo AC より

戦前は、玉ノ井駅から北へ、現在の名鉄名古屋本線木曽川堤駅付近にあった木曽川港駅まで延伸し、岐阜方面への乗り換えにも活用されていました。

●ブレイクタイム●

♪のこぎり二

繊維業が盛んであった一宮市には、採光を必要とする繊維関連工場で採用された「のこぎり屋根」の建物が多く残されています。一宮市簗屋の「のこぎり二」は、工場として使われなくなったのこぎり屋根の建物を、ギャラリーと貸アトリエとして再生したものです。ギャラリーでは、不定期でアート系の展示が行われているほか、貸アトリエには、文筆家、造形作家など、様々な表現者が入居しています。かつて稼働していた織機も残されており、当時の雰囲気を感じることができます。



一宮市観光協会 HP より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災と Seeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減齋の会・名古屋大学減災連携研究センター 2025 年 8 月)